仮設学校 千葉大OB支援

東京電力福島第一原子力発電所の事故で、住民すべてが避難を強いられている福島県富岡町の仮設学校の整備に、千葉大の卒業生たちが動き出した。町に二つある小学校の校長がそろって同大出身で、その窮状の訴えに、同窓生の支援の輪が広がった。早ければ今月中にも遊具が設置できる見通しという。

全町避難 福島・富岡の2小

富岡町は、福島第一原発のある大熊町の南隣。町全域が警戒区域に指定され、住民はばらばらに全国各地に避難した。

町にあった2校の小学校と2校の中学校は、西へ40キロほど離れた三春町の自動車部品の工場跡にまとまって移り、9月1日から授業を再開した。児童・生徒は計78人。管理棟や食堂の広い部屋を間仕切りして教室にしている。

富岡町の学校が開設された工場跡。遊具が設置される見通しになった＝福島県三春町、富岡第一小学校提供

出身校長の訴えに遊具

しかし体育館はない。グラウンドはあるが遊具はない。ブランコ、ジャングルジム、鉄棒、すべり台、雲梯（うんてい）の5点をそろえるだけで400万円以上必要だが、予算はない。

富岡第一小の八島敬校長は1975年度の同大卒業生。富岡第二小の根本修行校長はその一年後輩。子どもたちが思い切り遊べる環境を作れないかと八島さんが思いついたのが、同大のメールマガジン「卒業生との絆ニュース」。

10月4日配信の号に、八島さんの訴えが載った。「子どもたちは不自由な生活を強いられています。将来ある子どもたちに少しでも楽しい思い出を残してやりたいと祈るばかり」と、遊具の寄付を呼びかけた。

すぐに反応があった。園芸学部の卒業生の紹介で、遊具製造会社が寄付してくれる話が進んだ。設置費用も必要だが、義援金もすでに、様々な学部を卒業した約30人から200万円ほどが集まっており、まかなえる見通しだという。

事故前は409人いた富岡一小の児童数は18人、497人だった富岡二小は24人を数えるだけ。「千葉大が、人材、組織がしっかりしていることをあらためて知りました。先のまったく見えない不安な状況が続きますが頑張ります」と根本さんは語っている。

（渡辺延志）

平成23年11月8日　朝日新聞（千葉版）から